

## エッセイ『ウイルスと共存する時代に生きる』 9期鈴木

ジャレド・ダイヤモンド著『銃・病原菌・鉄』の原著“[guns, germs and steel](#)”を1期嘉納さんが紹介して頂いたことを今思い出している。原著は1998年に発行され、2005年に小生、購入して斜め読みした。

原語 Germs は細菌・病原菌などと訳され、Virus はウイルス・病原菌などに訳され、病原菌が共通の訳語となっていてどうしても混同してしまう。生物学・医学的には細菌とウイルスと区別されているが、素人には分かりにくいので以下（群馬大学・谷本弘一准教授の一部を引用）のように調べてみた。

細菌は遺伝子と、遺伝子から「増殖するための道具（蛋白質＝酵素）」を作る仕組みを持っており、栄養があれば自分で増殖できる。とびひ・扁桃腺・肺炎・結核・赤痢・コレラ・チフス・ペスト・破傷風・梅毒・食中毒（ノロウイルスを除く）・慢性胃炎（ピロリ菌）などである。

ウイルスは遺伝子しか持っていないので、寄生した細胞の持つ仕組みを借りなくてはならない。つまりウイルスは他の細胞の中に寄生しないと増殖できない。コロナウイルス・インフルエンザ・麻疹・エボラ出血熱・デング熱・AIDS・肝炎などである。

ところで、原著“guns, germs and steel”に「動物仲間からの地獄に落ちるような贈り物」（Deadly Gifts from Animal Friends）の諸事例【麻疹←牛（牛痘）、結核←牛、天然痘←牛（牛痘）又は家畜、インフルエンザ←豚・家鴨/鴨、百日咳←豚・犬、熱帯熱←鳥類（鶏・家鴨/鴨）】が示されている。でも上述の細菌とウイルスとの区別がなされていないが、人類以外の動物と（特に家畜を始めた時から）共存する中で寄生する細菌やウイルスに感染してしまったことを言いたかったのだろう。

現在の世界的大流行の新型コロナウイルスの感染源は蝙蝠との特定が一般的に流布されているが、氷河時代に全滅したマンモス等の死体に潜むウイルスが地球温暖化によってシベリアの永久凍土が表出して人類を虐めているのかも知れない（著者の単なる空想に過ぎないが・・・）。

感染症の中で特に有名なのが、中世時代の欧州に蔓延して多くの国々で人口の半数が死んだペスト（黒死病）である。鼠が感染媒体としてペスト菌があつたという間に欧州人に伝播したが、現在のような医学・科学が未発達だったので、死体の埋葬と隔離と神様に祈ってお助けして頂くしかなかったのはご承知の通りである。

新型コロナウイルスの感染はPCR(Polymerase Chain Reaction)検査によって容易に把握され、陽性者の隔離有無の判断に利用されている。また感染状況がIT化のお陰で瞬時に把握できるようになった。その点で黒死病やスペイン風邪大流行時に比べ雲泥の差の感があるも、各国なかなか感染拡大を抑えることが出来ないでいる。

その感染拡大に対して各国が都市封鎖とか外出自粛といった対策をとるも、自国内の感染制圧が今出来たのは数ヶ国に過ぎず、各国間の往来禁止を撤回できずにいる。先進国は、感染メカニズム解明はもとより、治療薬開発やワクチン開発が鋭意進められているも数年掛かるのではないかと専門家は言っており、従来の社会構造や社会生活を大胆に変更（コロナと共存）せざるを得ないようだ。

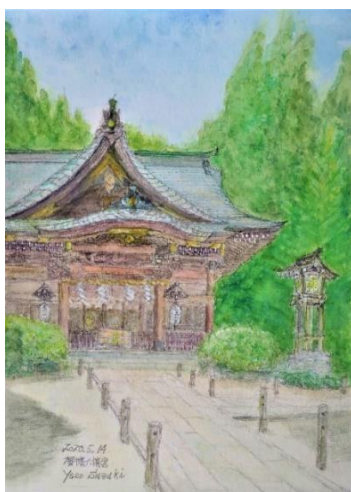
本来は加害者である人類はそれを気づかず、疫病・飢餓とどの時代にも被害者・犠牲者として対応せざるを得なかった（疫病と共存するという考え方はなかっただろう）。16 世紀は大航海時代と謳われ、欧米人が新地を求めて帆船で挑戦し、疫病の運び屋をしたのが既知の事実である。

でももっと遡れば、生命の歴史は約 38 億年前に細菌から始まったと言われており「不気味な侵入者」と呼ぶのは、大きな間違いである。人間が約 25 年ごとに子孫を残しながら図々しく地球上に住み続けているが、先住の細菌は秒単位で増殖（大腸菌が一番早い）しているので、増殖の点で普通の戦い方では勝ち目がない。新型コロナウイルスの感染力が強いのは、この半年間で世界 215 か国の 1,437 万人が感染し、60 万人強が死んでいることから分かる。

このように同時並行で感染している現代と、黒死病やスペイン風邪の大流行時代と大きく異なるのは、現代になってグローバル化が驚異的に進んだということであろう。つまりコスト・材料費・労働力との絡みでモノづくりが世界分業化し、地産地消という狭い範囲（国内或いは地域）での物流は縮小され、それに付随してか人的交流が飛行機という便利なもので可能にしたことが第一に挙げられるだろう。モノだけでなく、文化交流や観光等が飛行機や大型クルーズ船の運航が急速に拡大したのも大きな要因であろう。

でも、なぜウイルスや細菌の“卵”は世界中で孵化したのだろうか、つまり真の増殖・伝染の原因はなんだろうか少し考えてみよう。つまり現在私たちが最良と思っている対症療法では、ウイルスや細菌が何れ天下を取ってしまうかも知れない。ただそこには『人類が真剣に地球環境問題に対して考え、共存しなければ』との大前提がある。

繰り返すが、地球に棲み付いたのは細菌であり、ホモサピエンスではないということを思い起こすことだ。主人公であり地球を支配していると勘違いしている人類は自分たち人間の争い（都市国家対立、世界帝国設立、極地戦争・内戦、世界大戦、イデオロギー対立、移民問題、帰属問題、宗教戦争、世界覇権主義や自国第一主義横行等）をいつまで経っても解決できなくせに、潜在化している地球環境問題が直接自分に降りかかっていることは知らずに、また無視して、ましてや仮住まいをしているから、その「しっぺかえし」を受けているのかも知れない。



鬱憤晴らしと称して、コロナ外出自粛の禁制を破って  
柏市増尾にある廣幡八幡宮を描く（2020/5/14）

*** 豆知識 ***
<b>共存</b> coexistence 一緒にいても問題がない状態
<b>共生</b> symbiosis お互いにいないと生きていけない状態